現実の風景と自分の体験、漫画で見た記憶とがごっちゃになって時空を超えた脳内都市

穂村 弘さん

歌人

吉祥寺に住み始めたのは最近（2022年から）なんです。実家は埼玉で、杉並に住んでいたこともあるんですけど、漫画家の大島弓子先生、楳図かずお先生、諸星大二郎先生など、自分にとって神々と呼ぶべき人たちが住む吉祥寺に、いつかは住みたいと思っていました。ずっと飼いたかった猫も飼育可の物件が見つかったので、いよいよかな、と。高校生の頃から、大島先生の代表作で擬人化された子猫が主人公の『綿の国星』が大好きでした。作中で吉祥寺がチキジョージ、三鷹が夜たか、西荻が昼荻になっているネーミングセンスにも憧れましたね。だから、「吉祥寺に住んで猫を飼うなんて人生のアガリだ」と思いました。

実際に住んでみると、土日は人が多いなあと思います。杉並に住んでいたときは自分も土日に来ていたのにね（笑）。吉祥寺を歩いていると、現実の風景と自分の過去の体験、漫画や映像で見た記憶とがごっちゃになった脳内都市のように感じます。脳内マップには過去の時間の領域もあって、駅ビルのアトレを今でもロンロンと言ってしまったり。亡くなった友だちが駅の出口にロンロン口（くち）と書いてあるのを見て「ロンロンロみたいでかわいい」と言っていて、その思い出とともに僕にとっては今でもあそこは「ロンロンロ」なんだという感覚があるんです。

私たちの社会はお金と物質を最優先する資本主義を選択したわけだけど、それとは微妙に違う可能性もあり得るんじゃないかとうっすら思っている人たちにとって、吉祥寺は居心地がいい。財布を忘れて出掛けても何とかなりそうというか。実際に何とかなるわけじゃないとは思うんだけど（笑）。

穂村 弘
（ほむら・ひろし）

歌人。短歌のほか、エッセイ、評論、絵本、翻訳など幅広く手掛ける。1962年、北海道生まれ。1990年、歌集『シンジケート』でデビュー。90年代の「ニューウェーブ短歌」の中心的存在に。短歌評論集『短歌の友人』で伊藤整文学賞、『鳥肌が』で講談社エッセイ賞、第4歌集『水中翼船炎上中』で若山牧水賞を受賞。近著に『彗星交叉点』、読売新聞の人気連載をまとめた『蛸足ノート』など。

季刊むさしの 第144号（2023年冬号） 令和5年12月19日発行 企画・発行＝武蔵野市 問い合わせ先＝武蔵野市総合政策部 秘書広報課（TEL：0422-60-1804）